

地中海古代都市の研究 (118)

メッセネのアスクレピオス神殿のストアに関する建築史的考察

9. 建築歴史・意匠-4. 西洋建築史

正会員 ○吉武隆一<sup>3)</sup> 伊藤重剛<sup>1)</sup> 林田義伸<sup>2)</sup>

ギリシア建築 メッセネ ストア ヘレニズム

1. はじめに

熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長 伊藤重剛)は、2001年から毎年夏ギリシアの古代都市メッセネのアスクレピオス神域の実測調査を行っている。このストアの調査結果の一部は、すでに報告した。<sup>1)</sup> 本稿は、この調査で明らかになったストアの特徴を、他のストアやギリシア建築との比較を通して明らかにし、当該ストアの建築史的評価を行うことが目的である。

2. メッセネのストアの建築的特徴

2-1. 他の建物と複合化する囲い込み型のストア

メッセネのアスクレピオス神域のストアは、中央中庭に神殿、祭壇、無数の彫像が建ち、これを四方から取り囲む列柱廊であった(図1)。一般にストアは、もともと独立して建てられた、単純な箱形の建物であったと考えられている。<sup>2)</sup> しかし、複数の建物の配置や、アゴラや神域などの公共空間での一貫した配置計画に関心がもたれるようになったヘレニズム時代になると、個別の建物を複合化して造る有効な手法として、中庭を口字型に囲い込むストアを建て、その背後に建物を配置するようになった。実際、2つのストアを直行する方向に結合したL字型ストアや、3つのストアを結合したΠ字型ストア、及び口字型のストアの数は、ヘレニズムになって急激に増えている(表1)。

ストアの背後に建物を配置しない口字型のストアは、古くからあった。アルゴス・ヘライオンの西建物(紀元前6世紀終わり)、アテネの矩形建物(紀元前325年)、メガロポ

リスのゼウス神域(紀元前2世紀)、アルゴスの西建物(紀元前6世紀終わり)などはその例である。また、ストアの背後に部屋を配置するストアは、アテネのアゴラの南ストア(紀元前5世紀後半)以後、コリントの南ストアや、ブラウロンのアルテミス神域のストアなど、多くの建物に見られるが、これらは単純な一列のストアかΠ字型のストアで、口字型ではない。<sup>3)</sup> しかし、メッセネのストアでは、建設当初から口字型ストアの背後に、大きな部屋を一体として建てており、中庭内の建物とストア、及び背後の建物を建設当初から一貫した方法で建てたストアである。このようなストアは、オリンピアのレオニダイオン(紀元前4世紀半ば)や、エピダウロスのギムナシオン(紀元前3世紀)などがあり、<sup>4)</sup> メッセネのストアは、ストアとその背後の部屋を複合化して配置する上記の建物と共通する特徴を示している(図2)。

2-2. イオニア・コリント式の礎盤

ストア円柱は、コリント式で建てられており、礎盤は下か

表1 ストアの平面型と時代の関係

	L字型	Π字型	口字型	小計
アルカイック	3		2	5
クラシック	4	6	3	13
ヘレニズム	23	22	18	63
合計	30	28	23	81

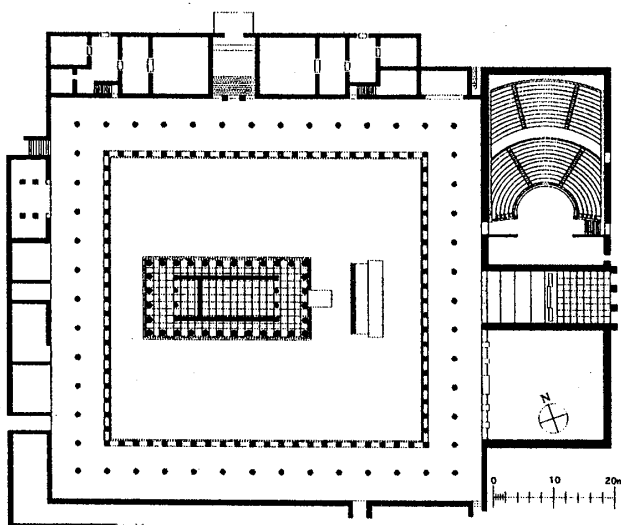


図1 メッセネ、アスクレピオス神域の平面図

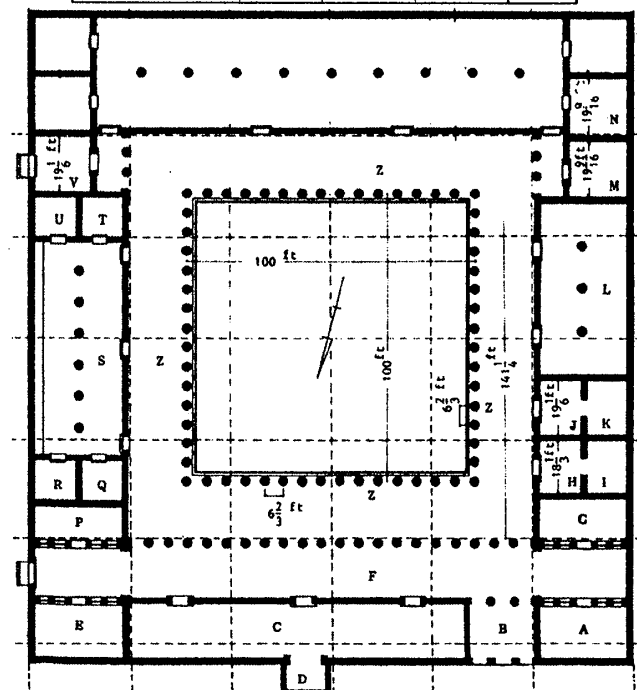


図2 エピダウロス、ギムナシオンの平面図

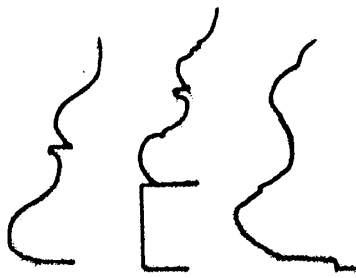
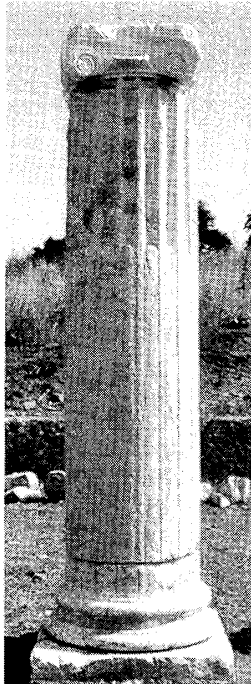


図3 (上) イオニア式・コリント式礎盤の比較

左：アテネ、エレクトイオン  
中：マグネシア、アルテミス神殿

右：メッセネ、アスクレピオス神域のストア

図4 (右) メガロポリス、フィリップのストアの内部円柱



らトルス・スコティア・トルスのアッティカ式モールディングが施されていた(図3)。

紀元前4世紀のペロポネソス半島では、ネメアのゼウス神殿に見られる、下からカベット・トルスの型がすでに流布していた。しかし、紀元前5世紀にアッティカ地方で出現したトルス・スコティア・トルスの型は、エレクトイオン(紀元前5世紀終わり)でほぼ完全な形になると、紀元前3世紀初期までにはペロポネソス半島でも受け入れられた。<sup>5)</sup> ペロポネソス半島南西にあるメッセネも、ストアが建設された頃にはアッティカ式モールディングが完全に受け入れられたことが分かる。それゆえ、メッセネのストアにおける礎盤のプロフィールは、紀元前5世紀から4世紀のアッティカ地方の建物(アテネのエレクトイオン、エピダウロスのトロス)や、ペロポネソス半島と同じように、独自の型を持ちながらも、後にアッティカ地方の型を受け入れたヘレニズム時代の小アジアの建物(マグネシアのアルテミス神殿、紀元前2世紀)に見られる礎盤の形に類似しているように思われる(図3)。

### 2-3. 胡麻殻線形フルート

ヘレニズム時代のストアでは、円柱の下から1/3ほどのまでの高さに、円柱のフルートを完全に仕上げず、ドリス式では多角形かフルートなしに、イオニア式では胡麻殻線形フルートをつけることが慣習になっていた。<sup>6)</sup> メッセネのストアでは、外部円柱と内部円柱共にコリント式円柱で、外部円柱のストア内側の半周と、外部円柱の全周に胡麻殻線形フルートが着けてあった。このような方法が最初に使い始めたのは、ヘレニズム時代のペルガモンの建築家と言われている。デルフィのアッタロス1世のストア(紀元前3世紀半ば)や、デロスの南ストア(紀元前3世紀半ば)に見られ、後に各地で使われるようになった。メッセネに近いメガロポリスでは、フィリップのストア(上部構造は再建されており、時代は不明)の内部円柱に胡麻殻線形フルートが使われていた(図4)。したがって、メッセネのストアの胡麻殻線

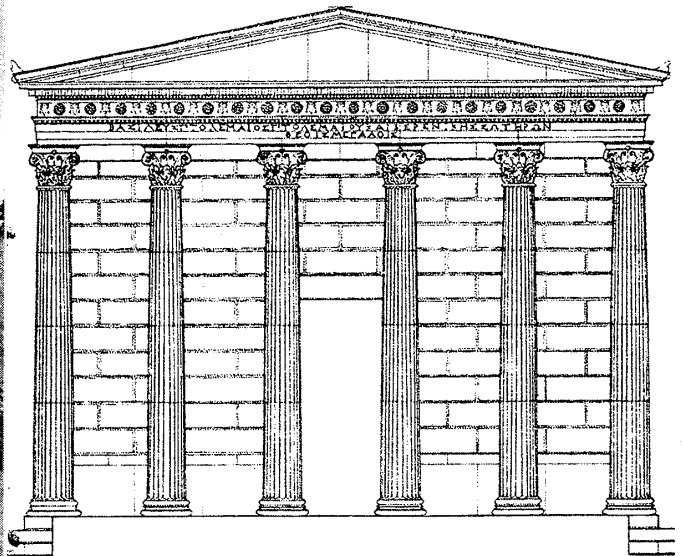


図5 サモトラケ、プトレマイオス二世のプロピロン西側ファサード

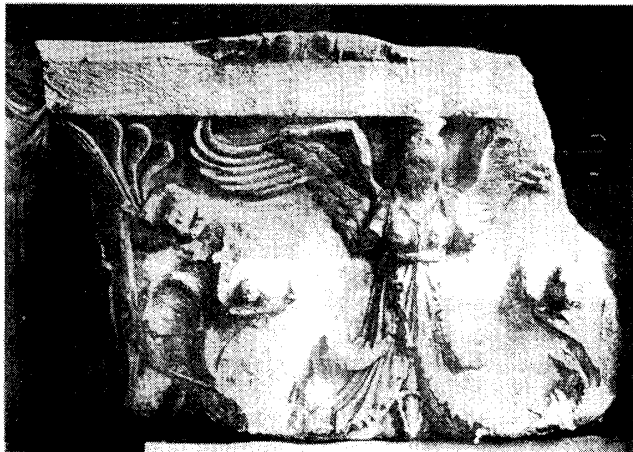
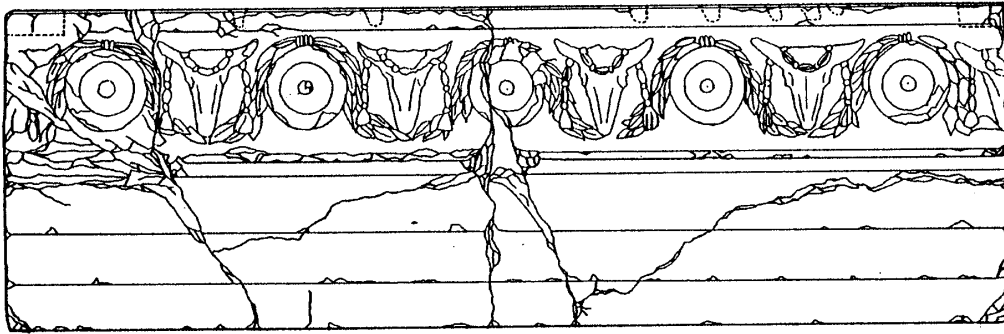
形フルートは、ヘレニズム時代の小アジアで見られるようになったこの技術が、ギリシア本土に伝わった可能性が高い。

### 2-4. コリント式ストア

これまで現場の資料を提供する十分な報告書が出版されなかったために、メッセネのストアは外部円柱はイオニア式、内部円柱はコリント式だと考える人もいた。しかし今回の調査で、メッセネのストアでは、外部円柱、内部円柱共にまぎれもなくコリント式オーダーであり、外部円柱にうまく合うイオニア式柱頭は存在しなかった。ギリシアのストアで、コリント式オーダーを採用したものは、メッセネの他、テーベの南西にあるミューズの谷のストア(外部円柱はイオニア式、内部円柱はコリント式、紀元前3世紀半ば)と、オリンピアの南ストア(外部円柱はドリス式、内部円柱はコリント式、紀元前4世紀半ば)以外は知られていない。<sup>7)</sup> したがって、メッセネのストアは外部円柱に初めてコリント式円柱を大規模に採用した最初のストアであった。

コリント式柱頭は、バッサエのアポロン神殿やデルフィのトロスなど、内部空間に使われることが多く、永い間外部空間に使われることはなかった。しかし、紀元前3世紀になると、コリント式の重要性が増してきた。紀元前3世紀初期、サモトラケの神域に王朝が寄贈した2つの建物には、コリント式が使われていた。アルシノエの女王が寄贈した巨大な円形の建物(アルシノエのロトンダ)では、コリント式オーダーを内部に、ドリス式オーダーを外部に用いている。

<sup>8)</sup> またプトレマイオス王朝が寄贈したプロピロン(プトレマイオス二世のプロピロン)では、コリント式オーダーのあるファサードが神域のある西側に、イオニア式オーダーのあるファサードが神域の外側に面して建てられている(図5)。後者のプトレマイオス二世のプロピロンは、おそらくコリント式オーダーを建物の外部に用いた最初の例と思われる。メッセネのストアでは、これをさらに大規模に展開したものと考え



られる。

## 2-5. コリント式柱頭とエロスとニケ

このように、コリント式オーダーを大規模に用いたが、そのコリント式柱頭には特異な特徴があった。調査の結果、柱頭には大きく分けて2種類あり、外部円柱には小さな柱頭、内部円柱には大きな柱頭が使われ、小さな柱頭にはエロス、小さな柱頭にはニケの彫像が彫られていた。ウェブによると、エロスを建築の装飾モチーフに用いたのはおそらく紀元前3世紀のベルガモンであるとされ、おもにフリーズの装飾に使われていた。<sup>9)</sup>しかし、ギリシア建築でエロスやニケをメッセネのように大規模に使った例はおそらくないだろう。メルクリンによると実際、エジプトからローマ時代までに柱頭にエロスを用いた例は4例、ニケを用いた例は3例しかないようだ。<sup>10)</sup>

エロスやニケではないようだが、小アジアにあるディディマのアポロン神殿のアンタ・キャピタルには、下半身が植物、上半身が翼のある女性像が彫られており(図6)、<sup>11)</sup>ヘレニズム時代の小アジアにおいて、建築の装飾モチーフとして半植物・半人間が使われていたことが伺われる。

## 2-6. フリーズの装飾モチーフ

メッセネのストアでは、フリーズの装飾モチーフに牛頭骨(Bull Heads or Bukulaniae)と聖杯(Phialae)を交互に並べ、その間を花綱で結んだ装飾がされていた(図7)。ヘレニズム時代には、特に牛頭骨と他のモチーフとを組み合わせた装飾が多く見られる。メッセネのように牛頭骨と聖杯の組合せは、キルセのアポロ神殿やプリエネのエフェイオンに見られる。<sup>12)</sup>聖杯の代わりに薔薇をモチーフに

したものもあり、共に円形なので、牛頭骨と交互に並べて使われていた。この牛頭骨と薔薇の組合せは、エピダウロスのトロスや、サモトラケのプロピレウス二世のプロピロン、マグネシアのアル

図6 (左) ディディマ、アポロン神殿のアンタ・キャピタル  
図7 (上) メッセネ、ストアのアーキトレイブーフリーズ部材

テミスの祭壇などに見られる。このように、牛頭骨と聖杯あるいは薔薇を交互に並べる

装飾は、ヘレニズム時代によく見られた例で、メッセネのストアもその時代の特徴をよく示しているといえる。

また、メッセネのストアでは、東西ストアで99個、南北ストアで104個の牛頭骨が並んでいたことが分かっている。古代ギリシアには「ヘカトンビー」という言葉があり、それは100頭分の去勢された雄牛の犠牲、すなわち多大な犠牲という意味であった。サモトラケのプロピレウス二世のプロピロン(紀元前3世紀初期)では、建物全体に巡らされたフリーズに、牛頭骨が104個、薔薇が100個並べられていた(図5)。牛頭骨はいずれもきれいに100個はないが、多大な犠牲という象徴的意味を込めて、100個に近い数を並べようとしたと思われる。

## 2-7. 後壁のスタッコ仕上げ

メッセネのストアの後壁は、下からトイコペイト、オルソスタット、平らな部材(Frieze)があり、その上を切石の整層積としている。切石の整層積の部分は、表面をスタッコで仕上げたことが分かっている。

ギリシア人は、スタッコの技術をかなり古い時代から知っていたようで、シチリアのアルカイックの神殿のすで見られる。しかしスタッコで切石積を表現する方法は、もっぱら住宅に多く見られる。すでに紀元前3世紀の住宅では、プリエネの住宅の壁面には、スタッコで石積を表現したものが残っている。またデロスの住宅やシチリアのモルガンティーナの住宅にも同様の例が見られる。<sup>14)</sup>

マグネシアのプリタネイオンは、住宅以外でスタッコによる切石積の表現をした貴重な例である。<sup>15)</sup>しかし、最も注目されるのは、サモトラケのヘロオンであろう。このヘロオンから、内陣の壁表面から剥離したスタッコの破片が出土している。レフマンはこの破片に石積の目地を表現した段差が着いていたことを根拠に、スタッコで切石の整層積を現した復元案を示している(図8)。<sup>16)</sup>

このように、スタッコで切石積を表現する方法は、主に住宅のインテリアで発達し、ヘレニズム後期になって、様々な建物に使われるようになった。メッセネのストア、神域を取り囲む半内部空間であって、長い壁面をあえてきれいに

仕上げた切石で仕上げるのではなく、スタッコで切石を積んだように見せたものと考えられる。この方法は、後にポンペイのバシリカに見られるような、壁の石積を大規模にスタッコで表現する技術につながるであろう。<sup>17)</sup>

ウェステージの最新の研究によれば、ヘレニズム時代の住宅の内壁仕上げは、白をベースに赤、黒、黄色が多く、まれに緑や青が使われた。通常トイコベイトのことは赤、オルソスタットは黒で仕上げていたという。<sup>18)</sup>したがって、メッセネでも彩色されていたと思われるが、色に関する直接的な証拠はなく、これは推測の域を出ない。

## 2-8. 控壁

メッセネのアスクレピオス神域は、南北方向の傾斜地に建てられているので、南ストアの背後には控壁があった。クールトンによると、ギリシア建築において控壁は一般的な技術ではなく、早い例としてはアルゴス・ヘライオンの南ストア（紀元前4世紀）に見られるが、よく使われるようになったのはヘレニズムになってからだと考えられている。<sup>19)</sup>ストアではないが、オロポスの「浴場」の後壁や、オリンピアの宝庫のテラスの背後にある壁などに控壁が見られらはヘレニズム時代の建物である。したがって、メッセネのストアにおけるヘレニズム時代の技術的特徴が、この控壁にも現れている。

## 3. 考察

メッセネのストアは、周囲の建物との複合化を意識した口字型のストアで、コリント式礎盤がアッティカ式のモールディングであり、胡麻殻線形フルート、牛頭骨の装飾モチーフ、控壁などのヘレニズム時代の特徴を示している。広い後壁の大半をスタッコで仕上げるなど、それまで建物の内部空間で多く使われてきた技術を半内部空間で採用し、ギリシア建築の中でもかなり早い時期にコリント式オーダーを建物外部に採用したストアであることが分かった。以上のことから、メッセネのストアは、歴史的にみて紀元前3世紀終わりから紀元前2世紀ごろの特徴を示しており、ヘレニズム初期から中期のストアであると考えられる。

また、メッセネのアスクレピオス神域は、ギリシアの神域としては神殿の建つ中庭を完全に囲い込んだ最初の神域であり、ローマの神域の先駆けといえる。

(注)

- 1) スタアの調査報告については、吉武隆一、他2名「ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域におけるストアの研究 オーダー及び小屋組の復元」、日本建築学会計画系論文集 第585号、2004年11月、207-212頁を参照。
- 2) J. J. Coulton, *The Architectural Development of Greek Stoa*, Oxford, 1976, pp.26-38.
- 3) 建物の年代はクールトンによった。*Ibid*, pp. 212-294.

- 4) オリンピアのレオニダイオンについては、A. Malwitz, *Olympia und seine Bauten*, Munchen, 1972, p. 246. エピダウロスのギムナシオンについては、J. Ito, *Theory and Practice of Site Planning Classical Sanctuaries*, Fukuoka, 2002, p. 121.
- 5) J. J. Coulton, *Greek Architects at Work - Problems of Structure and Design*, London, 1977, pp. 101-102.
- 6) J. J. Coulton, *Ibid*, 1976, p. 112.
- 7) J. J. Coulton, *Ibid*, 1976, pp. 212-294.
- 8) サモトラケ、アルシノエのロトンダとプロトマイオス二世のプロピロンについては以下を参照。K. Lehmann, P. W. Lehmann, *Samothece; Excavations Conducted by the Institute of Fine Arts, New York University (Bollingen Series 60, 1958- )*; vol. 7, J. R. McCredie, et. al., *The Rotunda of Arsinoe*, 1992; vol. 10, A. Frazer, *The Propylon of Ptolemy II*, 1990.
- 9) P. A. Webb, *Hellenistic Architectural Sculpture - Figural Motifs in Western Anatolia and the Aegean Islands*, London, 1996, pp. 31-32.
- 10) E. Mercklin, *Antike Figuralkapitelle*, Berlin, 1962, pp. 55-57.
- 11) T. Weigand, *Didyma*, Berlin, 1941, Pl. 219.
- 12) Webb, *Ibid*, pp. 29-30.
- 13) K. Lehmann, *Ibid*, 1990, Pl. 73-75.
- 14) プリエネの住宅については、T. Wiegand, H. Schrader, *Priene; Ergebnisse der Ausgrabungen und Untersuchungen in den Jahren, Berlin, 1895-8*. デロスの住宅については、M. Bulard, *Peintures murales et mosaïques de Delos*, Paris, 1908. シチリアのモルガニタについては、E. Sioqvist, "Excavation at Morgantina," *AJA* 64, 1960, p. 131.
- 15) C. Humann, *Magnesia am Maender*, Berlin, 1904, p. 138, Fig. 150.
- 16) K. Lehmann, P. W. Lehmann, *Samothece; Excavations Conducted by the Institute of Fine Arts, New York University (Bollingen Series 60, 1958- )*; vol. 1, P. W. Lehman, M. R. Jones, *The Hieron*, 1969, pp. 138-140, Pl. 57, 93, 94, 104-16.
- 17) K. Ohr, *Die Basilika in Pompeji*, Berlin, 1991, Pl. 16-17.
- 18) R. G. Westgate, "Space and Decoration in Hellenistic Houses," *BSA* 95, 2000, pp. 391-426. 特に pp. 397-400.
- 19) Coulton, *Ibid*, 1976, pp. 141-142.

(図版出典)

表1 Coulton, *Ibid*, 1976, pp. 212-294. より作成

図1 熊本大学ギリシア古代建築調査団

図2 J. Ito, *Ibid*, Fig. 43.

図3 Coulton, *Ibid*, 1977, Fig. 40-20, 33. と熊本大学ギリシア古代建築調査団作成の図面を筆者が修正

図4 林田義伸撮影

図5 K. Lehmann, *Ibid*, 1990, Pl. 73.

図6 Weigand, *Ibid*, Pl. 219.

図7 熊本大学ギリシア古代建築調査団

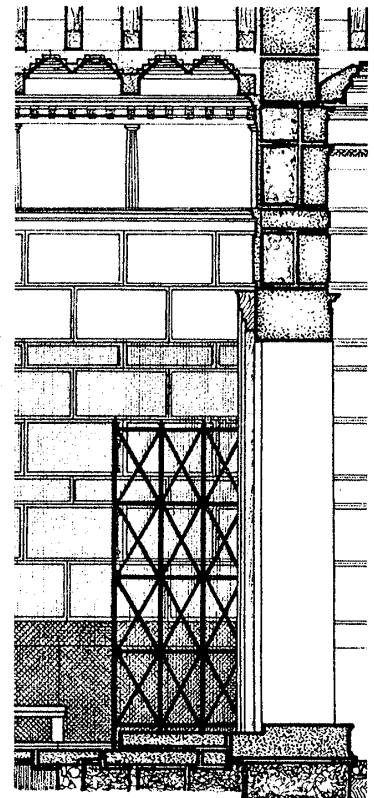


図8 サモトラケのヘロン

1) 熊本大学助教授 工博

2) 都城高等専門学校教授 博(工)

3) 熊本大学大学院自然科学研究科 工修

Assoc. Prof., Kumamoto University, Dr. Eng.

Prof., Miyakonojo National Collage of Technology, Dr.Eng.

Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University, M. Eng.